

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02245

研究課題名(和文) 1930年前後における女性作家・知識人のヘゲモニー闘争-『女人芸術』を通して

研究課題名(英文) Hegemony struggle of women artists and intellectuals around 1930 - Through "Women's Art"

研究代表者

飯田 祐子 (IIDA, YUKO)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：80278803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、雑誌『女人芸術』(1928-32)を中心として、1930年前後における女性作家・知識人のヘゲモニー闘争の様相を検証した。『女人芸術』は、文芸雑誌として出発した後、左傾化しており、その過程で「女性」の分化・多数化が確認された。「階級問題」が全面的に重要視されることで、まず大正期の女性解放運動が否定された。次にアナキズムとマルクス主義グループの対立があり、さらにはマルクス主義者の中の急進派と中道派との分化が確認される。最終的に雑誌の中心を占めたのは急進的マルクス主義者たちであった。とはいえ「女性」全体に語りかける要素は最後まで残り、周縁に普遍的な思考が認められることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we focused on the magazine 'Women's Art' (1928-32) and examined the aspect of the hegemony struggle of women writers and intellectuals around 1930. "Women art" departed as a literary magazine, then turned to the left, and in the process "women" differentiation was confirmed. The emphasis on the "class problem" in its entirety first denied the women's liberation movement in the Taisho era. Then there was a conflict between anarchist and Marxist, and furthermore differentiation between radical and middle group among Marxists was confirmed. The radical Marxists eventually occupied the center of the magazine. Nonetheless, the elements spoken to the whole "female" remained to the end, and it became clear that universal thinking was recognized at the periphery.

研究分野：日本文学

キーワード：女性知識人 女性表現者 マルクス主義 アナキズム 女性雑誌 女性の多数性 ヘゲモニー闘争

## 1. 研究開始当初の背景

「女性」問題の発見に主眼がおかれてきた従来の女性文学研究においては、異なる文脈で個別に問題が抽出されており(主婦、新しい女、モダンガール、職業婦人など)立場の異なる女性相互の関係性については未だ十分な検証がなかった。そこで、本研究が掲げた最も大きな問いは、それらの異質な女性たちは、どのように関係していたのかというものである。ことに、1920年代から1930年代は、ブルジョア/無産階級、主婦/職業婦人、都市/地方、個人志向/組織志向といった対立軸によって亀裂が前景化する時期である。分析対象とした『女人芸術』は、主宰者の長谷川時雨が、「女性」のための雑誌という理念のもとに、「女性」であることを唯一の条件として広く執筆者を募ったため、多様な立場の女性が集結した稀有な雑誌であり、複数の「女性」カテゴリーの交差の様相を検証するのに適している。当時の女性作家・女性知識人が集結したその場では、連帯よりはむしろ立場の相違が際立っている。衝突や摩擦あるいは接合がいかんして生じているかを分析し、ヘゲモニー闘争として女性との関係性を解明することとした。

『女人芸術』に関する研究は、驚くほどに少ない。当事者の聞き取り調査とともに雑誌全体を概観した1980年代初頭の尾形明子の研究(『女人芸術の世界：長谷川時雨とその周辺』(ドメス出版、1980)『女人芸術の人びと』(ドメス出版、1981)の後、ほとんど研究が進んでいなかった。(単行本としては、座談会に焦点をあてたシュリーディーヴィ・レッディ『雑誌『女人芸術』におけるジェンダー・言説・メディア』(学術出版会、2010)があるのみであり、論文数も僅かである)。国外では、2013年に『Japan Forum』(Vol.25, No.33)にて特集が生まれ、『女人芸術』の重要度に比して不当に無視されてきた現状が批判されていた。こうした状況をふまえ、女性文化研究の未進展領域に現在の研究水準からあらためて検討を加えることとした。

『女人芸術』が多様な表現者が集った文芸雑誌から左翼雑誌へ変質したことについてはすでに指摘があったが、本研究では、雑誌の変質をヘゲモニー闘争として捉え直し、女性作家・女性知識人の多様性と関係性の解明を目指した。ヘゲモニー理論については、主としてラクラウ、ムフの理論(『民主主義の革命』第二版、2001 邦訳、ちくま学芸文庫2012)を参照し、ヘゲモニーが言説上の実践のなかで流動的に構築されるプロセスを明らかにすることを企図した。

## 2. 研究の目的

1930年前後は、女性作家・女性知識人の分裂が顕著になった時期である。本研究では、

この分裂の時代に女性作家・女性知識人が集結した雑誌『女人芸術』を分析対象とし、立場の異なる女性作家・女性知識人たちのヘゲモニー闘争の様相を明らかにする。

多層性を内包する「女性」という括りを保持し続けた『女人芸術』には、同時期の商業誌や男性中心の雑誌よりも、左傾化の時代における文化的思想的闘争の痕跡が生々しいかたちで刻まれている。それゆえ、本研究は当時の「女性」カテゴリーの構成とヘゲモニー闘争を明らかにするものであると同時に、左傾化の時代に文化の場で思想的秩序が再編されていく過程とその様相を浮上させる。

## 3. 研究の方法

新たな分析の視点として、以下の5点を導入した。

### (1) 女性表現者・知識人の多様性とアイデンティティの関係

『女人芸術』の執筆者は、リベラルな女性解放運動によって生まれた「新しい女」、モダニズム系の女性作家、左翼女性知識人など多様で、自他を分ける対立軸が流動的かつ複合的に構成されている。『女人芸術』に執筆した女性作家・知識人が、それぞれの立場で、「女性」という普遍的カテゴリーをたてると同時にそれを分節化する具体的様相を分析する。また、アイデンティティの多層的構成という今日的な知見を前提として、「女性」カテゴリーと自己のアイデンティティや代表性の関係を明らかにする。

### (2) ジャンル規範(小説/評論/座談会)との交渉の過程

『女人芸術』掲載のジャンルのうち、主なものとして、小説、評論、座談会の三つに注目する。各ジャンルには、形式や内容を制約する規範が存在している。表現者は、その規範と交渉しながら執筆するため、ヘゲモニー闘争の形態はジャンルによって異なることが予想される。小説では異種文体の混交がおこりやすく、評論ではむしろ文体の統一性が強く求められる。また座談会では、場の共有による接近が示される可能性がある。それらのジャンルが複合的に組み合わせられた雑誌の誌面において、どのようにヘゲモニー闘争が構成されるかについて明らかにする。

### (3) ソヴィエト関連情報による規範生成について

『女人芸術』には、左傾化に従ってソヴィエト関連の情報が多く取り込まれている。それらは、ジェンダー・ニュートラルなものではない。その継続的な掲載は、雑誌の左傾化の結果というより原因を構成するものである。ソヴィエト関連の情報が、左翼思想の紹介にとどまらず、女性ジェンダーの規範とし

ての機能を明らかにするとともに、ヘゲモニー闘争との関わりを検証する。

(4) 読者によるフィードバックおよび読者間ネットワーク

『女人芸術』には読者の声を反映した「読者通信」欄が断続的に設けられ、また編集後記などを通して読者からの反応が紹介されている。それらの読者は、『女人芸術』が獲得した購買者、情報の受け取り手であるというより、雑誌の方向性に積極的に関与する存在となっている。左翼思想の高まりは、読者の声を、期待以上の要望へと育てている。読者の声を、ヘゲモニー闘争を構成する一要因としてとらえ、その量と質、影響を明確化する。

(5) メディアにおける女性知識人・女性作家に関する表象との交渉について

『女人芸術』を取り囲む雑誌や新聞などのメディアにおいて、女性知識人や女性作家がどのように語られているかを把握する。また『女人芸術』がどのように受容、評価されているかについて明らかにする。これらの声の主の多くは男性知識人である。『女人芸術』における応答の様相を分析することで、ヘゲモニー闘争が同時代の要請に応答的に構成される様相を明らかにする。

研究組織としては、代表者と研究分担者2名(中谷いずみ、笹尾佳代)、研究協力者1名(尾形明子)という体制で進めた。年次計画として、各年度5回の研究会を行い、加えて、平成28年度は公開研究会1回を、最終年度は学会等で公開シンポジウム1回を行うこと、成果の報告として書籍としての刊行を目指すこととした。

なお、基礎作業として、目次(巻号、年月日、ページ、記事題目、執筆者、記事カテゴリ、執筆者所在地等)と広告(巻号、年月日、巻内位置およびページ数、記事の大きさ、広告主、商品名、商品カテゴリ)を記載したデータベースを作成し、数量的な分類を可能にする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

本研究では、『女人芸術』(1928-1932)の分析を通して、1930年前後の女性作家・女性知識人のヘゲモニー闘争の様相を明らかにした。2015年度-2017年度にわたって研究会を10回、講演会を2回(2015年度、2016年度)、公開研究会を1回(2016年度)、国際シンポジウムを1回(2017年度)開催した。全体を通して得られた成果の内容を、本研究の考察の軸とした5つの観点に沿って、以下にまとめる。

女性表現者・知識人の多様性とアイデンティティの関係

『女人芸術』に集った女性は、実に多様であった。与謝野晶子や岡田八千代、生田花世や今井邦子といった明治から書き続けてきた女性表現者、女性による日本初の雑誌『青鞥』を立ち上げた平塚らいてうや尾竹紅吉、評論家としてはマルクシストの山川菊枝や神近市子、一方にはアナキストの望月百合子や高群逸枝なども執筆している。小説家としては、プロレタリア作家の宮本百合子や平林たい子、佐多稲子、中本たか子、松田解子などが気焔を吐き、モダニズム系の作家では尾崎翠や野溝七生子が独特の世界を提示した。新人の発掘にも力を入れ、『女人芸術』から世に出た最も有名な作家として、林芙美子がいる。『女人芸術』は、1930年前後の女性表現者・知識人が立場を越えて集った雑誌であり、それゆえ「女性」の多数性が顕著に現れた場であるといえる。

多数化した「女性」は横並びに並列していたわけではない。従来から左傾化したことは指摘されてきたが、その過程では女性たちの間のヘゲモニー闘争が認められた。雑誌の発刊時から指摘できることは、「階級問題」が全面的に重要視されていることである。大正期のリベラルな女性解放運動は、当初よりブルジョワ的であるとして否定された。『女人芸術』は『青鞥』に次ぐ女性による女性雑誌として位置づけられてきたが、むしろ『青鞥』との切断が際立っていることに注意せねばならない。平塚らいてう自身も「階級問題」の重要性を説き、新たな局面に入っていることを認めている。次に、重要な分岐はアナキズムとマルクス主義グループの対立である。『女人芸術』では、第二巻(1929年)後半から第三巻(1930年)初めにかけて「アナボル論争」として認識された論争が起こっており、これについて検証した。「既に十年近く前」になされた議論が再現されたに過ぎないという評価が当時よりされていたが、文学領域における「アナボル論争」は、1927年初頭に起こっており、『女人芸術』の論争がひどく遅れたものとなっているわけではないことを明らかにした。また女性問題としては、さらに婦人参政権運動をめぐるアナボル論争が先行している。とくに重要なのは、分裂と集合をめぐる議論がなされていた点である。「女性」と「階級」という二つの力学が働いており、その組み合わせで立場は少なくとも四つに分割できる。「女性」か「階級」かというだけでなく(つまり二つではない)、第一は、「階級一元主義」で「女性」の多数性には配慮しないもの(神近市子など)。第二に、「無産婦人」という「女性」カテゴリを大きな唯一のものとして提示し、「階級」の多数性には配慮しないもの(奥むめおなど)。第三に、多数性に配慮するものの「階級」を前景化するもの(山川菊栄など)。第四に、多数性を前提として、「女性」というカテゴリでの統一を唱えるもの(高群逸枝など)。ここから分かるのは、マルクス主義

陣営も多数化しているということである。マルクス主義者たちは、この点に自己言及せず、アナキストによって多数性あるいは分裂が度々指摘されている。多数化するほどの厚みがあったと考えられ、ヘゲモニー闘争の点では、マルクス主義者が優勢であった。『女人芸術』においても、アナキストは退けられていった。またさらには、マルクス主義者の中の急進派と中道派との分化も確認され、中道派が排除され、最終的に急進的マルクス主義者たちが雑誌のヘゲモニーを獲得した。『女人芸術』を軸として、執筆者の立場や論争の経過を詳細に検討した結果、1930年前後に発生した女性の多数化と集合化のダイナミズムが確認され、またその多数性の交差の様相が明らかにされた。

#### ジャンル規範との交渉の過程

左傾化の過程で、とくに小説において、プロレタリア文学というカテゴリーが規範化し、多くの書き手がこれと交渉していることが浮かび上がった。なかでも『女人芸術』から創作をスタートさせ、発表の場を求めた新人作家たちの作品には、このような場の力学との交渉の軌跡を顕著に認められた。男性作家によるプロレタリア文学や、また女性の中の主要なプロレタリア文学作家の作品とは異なり、これらの中には、社会運動の周縁のあり方を窺わせるものや、多様な関わり方を浮かび上がらせるものが発見された。頻繁に語られた話形としては、「プチブル的自己淘汰の物語」や「覚醒の物語」がある。運動の周囲から、運動に接していく段階に焦点化するものであり、プロレタリア文学の主流が資本主義批判の実践であったことを参照すれば、その個人性や周縁性を感じとることができる。また、第三巻（1930）の末には「相互討論」欄が設けられ、掲載された作品に関する批評がなされている。プロレタリア文学が規範化するなかで、規範に照らし合わせた評価がなされていることが確認できる。

#### ソヴィエト関連情報の導入を含む社会運動との関連性

『女人芸術』の特徴として指摘できるのは、外地・外国の情報が多きことである。ヨーロッパの各地に関する情報や、文学作品の翻訳、またアジアの各地に関する情報などが、毎号必ず掲載されている。同時期の女性雑誌と比較しても、際立って外地・外国の情報が多く、『女人芸術』という場が、外部への接続に積極的であったことが確認された。そのような全般的な傾向がありながら、三巻以降に突出して増加するのがソヴィエト関連情報である。出産・育児などの問題から労働運動まで幅広く関心が向けられ、あり得べき社会の規範として参照されている。雑誌の名称を『女人大衆』へと変更するという提案が、読者からなされ、頻りに意見が交わされた。最終的には主宰者である長谷川時雨の一存で変更なしということになったが、こうした動きは、社会運動への接近を意味している。従来の研

究では、『女人芸術』と『文藝春秋』との近さが指摘されてきたが、左傾化してからは『戦旗』との関係が深まっている。執筆者の重なりもみられ、『戦旗』について言及した記事も掲載された。また、巻頭グラビアページに労働争議の様子やソヴィエトを含む外国の労働運動の写真が掲載され、『女人大衆』を発売して社会運動の理論が分かりやすく紹介されるなど、動員が図られている。ナップの運動に本格的に関わりを持つようになり自身が経験したストライキを小説の形で執筆した中本たか子や、女工のための「労働女塾」を開き『女人芸術』では労働運動史を執筆した織本貞代などの、運動の牽引者も現れた。『女人芸術』は、多角的に情報を流通させ、社会運動を生み出す機能を果たしたと考えられる。また、今後さらに研究を進めるべきなのは、アジア諸地域との情報の流通である。一例としては、コロタイズムの波がアジアではどのように起こったのか、より詳しい検証が必要である。『女人芸術』における情報が、アジアへ流通していた痕跡も発見されている。この点については、調査を進める必要がある。

#### 読者によるフィードバックおよび読者間ネットワーク

読者のネットワークの形成過程として、最も大きな働きをしたのは、「女人聯盟」の形成である。「女人聯盟員」と名付けられた読者は海を越えて広がり、朝鮮や台湾や樺太、中国やインド、遠くは北南米からも熱い声が寄せられた。5人以上の読者の集まる所には女人聯盟支部の結成を可とし、支部の発足会には、「女人聯盟」と同時に設置された本社の「講演部」が出向いた。福岡、大阪、名古屋などの各地、および定期的に東京で行われた講演会は、「愛読者」との直接的な交流が図られたものであり、講演記録はその活気に満ちた様子を詳細に伝えている。聯盟員の氏名は「女人大衆」に一部掲載されているが、総数は定かではない。第3巻2号の編集後記には、「二千何百枚」という年賀状を書き、その大部分が聯盟員に宛てられたものであると述べてられている。懸賞募集で生まれた松田解子作詞の『全女性進出行進曲』は山田耕筰の作曲でコロンビアからレコード化され、各地で行われた講演会の際には声を合わせて合唱された。読者共同体の創造が企図された。読者の中には左傾化した読者とそうではない読者が最後まで混在していた。それに応答するように、誌面全体の方向性としては左傾化していたにも関わらず、階級を付さない「女性」一般への語りかけが、最後まで随所に見出される。『雑誌』の雑種性が、最後まで維持されていたといえる。

#### メディアにおける女性表現者・女性知識人に関する表象との交渉について

この点については、『女人芸術』がどのような評価を受けたかを精査した結果、左傾化した後に評価が高まったことが確認された。

以上の成果を、最終年度に、名古屋大学附属「アジアの中の日本文化研究センター」主催定例国際シンポジウムに組み込み、「1930年前後の文化生産とジェンダー」をテーマにした国際シンポジウムを企画した(2018年1月20,21日)。セッション1「マルクス主義におけるジェンダー表象」では、中谷いずみ(分担者)が「階級闘争と女性解放の夢」と題して、社会運動の論理におけるジェンダー構造について報告した( に関連)。セッション2「交渉する表現主体とジェンダー」では、笹尾佳代(分担者)が「『女人芸術』の新人作家 社会運動と 文学 の交渉」と題して、新人作家の文学場の力学との交渉の痕跡を讀解した( に関連)。セッション3「女性知識人の1930年前後」では、飯田祐子(代表者)が「『女性』の分裂と集合をめぐる闘争」と題して、1930年前後に発生した女性の多数化と集合化のダイナミズムを確認した( およびヘゲモニー闘争としての総括)。また、シンポジウムに合わせて「『女人芸術』という回路」と題した展示を、開催会場であるジェンダー・リサーチ・ライブラリにて開催した(2018年1月16日-21日)。「『女人芸術』の同時代評( に関連)」「『女人芸術』と社会運動との関わり( に関連)」「読者のネットワークおよび外地・外部との繋がり( に関連)」「東アジアの女性雑誌との関連性」という四つのテーマについては、ポスター報告を行った。

シンポジウムでなされた成果報告は、単行本化が決定している。「女性と闘争」(青弓社)にて、2018年刊行の予定である。

他に、基礎作業となる目次のデータベース化を行った。執筆者・記事分量・記事内容・記事ジャンルについて、正確なデータ化を行い、既存の総目次・索引の漏れを補うとともに今後の作業の基盤を整えた。またこれまで全く分析されていない広告についても、広告主・広告分量・広告ジャンルのデータ化を行った。

(2) 得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

本研究の学術的貢献は、以下の5つにまとめられる。

従来の近代女性文化研究においては、個々の「女性」問題が文脈ごとに提示されてきた。本研究では、多様な女性が集結した場における分裂や摩擦を含んだ関係性を分析した。これまでに十分な検証がなかった、異質な女性相互の関係性を解析する点で、女性文学研究における学術的意義は大きい。

本研究では、ヘゲモニー闘争を複数の位相から分析した。「女性」か「階級」かという二極が構成されていたのではなく、一元化して考えるか多数性を前景化するかという対立に「女性」と「階級」をそれぞれ組み合わせた四つタイプの議論を抽出した。1930年代

における女性のヘゲモニー闘争が立体的に構築されていくプロセスを流動的に描き出すという、独創的な成果が得られた。

女性文学史における未進展領域といえる『女人芸術』について、現在の研究水準から再検討し、その内実を明らかにした。

本研究では、1910年代のリベラルな女性解放運動において一枚岩的に言挙げされた「女性」というカテゴリーが、1930年前後には多元化していることを詳細に解析したが、この分裂は、1940年代には銃後の「女性」として再統合されていく。本研究により、近代女性文化史の動的なプロセスにおける女性知識人の振る舞いの再検討が開始しうる。

消費を中心とした「女性」像とは異なる動向が顕著に見出されることを指摘した。これは、女性読者に関心を集中させ、消費や戦局に向けて女性たちがいかに構造化され動員されたかを分析してきた従来の女性雑誌研究に新たな局面を開くものである。

### (3)【今後の展望】

今後はさらに、「生産 = 男性 / 受容と消費 = 女性」という既存の枠組を組みかえるべく、女性知識人や女性表現者による文化生産の動向について検証することが必要である。継続して検討すべき論点が二つ見出されたが、その一つは文化実践の形成における左翼思想の重要性である。女性表現者・知識人の文化実践を時代の流れのなかに再配置するためにも、社会運動を形成する左翼思想において、いかにジェンダーとセクシュアリティの力学が組み入れられているかを検証する必要がある。この点について共同研究(基盤研究(C))「1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ」、課題番号18K00316)を開始した。もう一つの論点は、外地および外国の多様な情報の流通を、より広く同時代の領域横断的な徴候として検討する必要性である。帝国主義的版図の拡大や国際的な社会主義思想の伝播など、今日の国や地域の区画をまたぐかたちで言説が流通していた1930年代を検証するためには、国や地域を横断して行う国際共同研究が必須である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 中谷いずみ「空白の「文学史」を読む プロレタリア運動にみる性と階級のポリテクス」、『日本近代文学』98、査読有、pp.132-145、2018
2. 中谷いずみ「戦争への抵抗と責任 松田解子『地底の人々』と強制労働の記憶」、『社会文学』46、査読有、pp.45-59、2017
3. 笹尾佳代「メディアとしての白蓮事件：事件報道と「鳳凰天に搏つ」をめぐる」、

笹尾佳代、『Juncture：超域的日本文化研究』  
6、査読無、pp. 42-54、2015

〔学会発表〕(計 13 件)

1. 飯田祐子「『女性』の分裂と集合をめぐる闘争」、アジアの中の日本文化研究センター国際シンポジウム「1930年前後の文化生産とジェンダー」、2018
2. 中谷いずみ「階級闘争と女性解放の夢」、アジアの中の日本文化研究センター国際シンポジウム「1930年前後の文化生産とジェンダー」、2018
3. 笹尾佳代「『女人芸術』の新人作家 社会運動と文学の交渉」、アジアの中の日本文化研究センター国際シンポジウム「1930年前後の文化生産とジェンダー」、2018
4. 中谷いずみ、「空白の『文学史』を読む “政治と文学” にみるジェンダー・ポリティクス」日本近代文学会秋季大会、2017
5. 飯田祐子、「高群逸枝と『女人芸術』」、『女人芸術』公開研究会、2017
6. 中谷いずみ、「『女人芸術』創刊前後 無産者運動と女性解放、『女人芸術』公開研究会、2017
7. 笹尾佳代「『女人芸術』の創作—交渉の痕跡として」、『女人芸術』公開研究会、2017
8. 中谷いずみ、「アジアの連帯」と強制連行の記憶／記録 松田解子『地底の人々』、ワークショップ「東アジア冷戦と移動 強制労働の経験と記憶」、2017
9. 笹尾佳代「メディアイメージと女性作家」神戸女学院大学総合文化学科専門部会研究発表会、2016

〔図書〕(計 2 件)

1. 飯田祐子・中谷いずみ・笹尾佳代(編著)『女性と闘争』、青弓社、2018(刊行予定)

〔その他〕

1. 『女人芸術』目次および広告項目データベース作成(未公開)
2. 展示『女人芸術という回路』、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ、2018

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

飯田 祐子 (IIDA, Yuko)  
名古屋大学・人文学研究科・教授  
研究者番号：80278803

### (2)研究分担者

中谷 いずみ (NAKAYA, Izumi)  
二松学舎大学・文学部・准教授  
研究者番号：10366544

笹尾佳代 (SASAO, Kayo)  
神戸女学院大学・文学部・准教授  
研究者番号：160567551

### (4)研究協力者

尾形 明子 (OGATA, Akiko)  
NPO 現代女性文化研究所・理事